

ワンダー・オブ・ 石棒

— 塩屋金清神社遺跡



岐阜県
縄文時代

「岐阜は不思議なところだわ」
いつかの宴の席のこと。

「こんださん、岐阜出身だよな？ おもしろいから深掘りしてみたらいいよ」といわれ、ぼかんとしてしまった。

こんなことをわたしにいったのは、かつて某テレビ局に勤めていた人だ。小学生の頃のわたしは、その人がつくった番組にドはまりし、テレビにかぶりついて見ていた。わたしにとって神のような人だ。

わたしの神が「岐阜は不思議な場所だ」という。
ぼかん……。

ななが一体どう不思議でおもしろいのか、まったくわからない。
ほどなくして、今度は「飛驒は縄文時代のベッドタウンだった」という文化財関係者に出

会った。

ええ!? あんなに山深い場所がベッドタウン？

実際、山がちな岐阜県のなかでも飛驒地方は特に山深い。たしかにわたしは岐阜県出身ではあるが、三重県境という南の端で生まれ育った。わたしにとっての飛驒は、夏の家族旅行で下道を6時間以上かけて車で行くような場所だった。あの山深くて遠くまで行きづらい飛驒がベッドタウンだったなんて、不思議なことを聞いてしまった。

その後「飛驒に日本一の縄文の遺跡がある」ことも知ってしまった。

これは行かねばならん……と思うものの、尻込みしてしまう。それほどに、飛驒は遠い。そして行きづらい。東京に住んでいるわたしが飛驒へ行くには、まず東京駅に出て名古屋へ、特急に乗り換えて在来線の最寄り駅へ。合計で7時間ほどかかる。そうだ、北陸新幹線という手もあるんだった。だったら、東京駅から北陸新幹線に乗って、富山で在来線に乗り換えて最寄り駅へ。このルートでも5時間。

そんな場所にどんな日本一の縄文遺跡があるかというと、石棒生産量日本一の遺跡だ。男性器を模した石の棒、「石棒」。縄文時代の祭祀の道具と考えられている。

なにをしとるんや、飛驒の縄文人たちよ。

たしかに不思議でおもしろい。独特すぎる。きっと石棒をつくらずにはいられなかった理由があるはずだ。これは現地に行ってみなければなるまい。全国に誇れる縄文遺跡が地元岐阜にあるというのに、距離に負けていては縄文好きの名が廃る。それに、とことん石棒にこだわった飛驒の縄文人、きらいじゃない。むしろ、好き。

「石棒日本一」に背中を押されたわたしは、ようやく重い腰を上げたのだった。

縄文時代のベッドタウン

遺跡の名前を塩屋金清神社遺跡という。

なんだか光り輝くありがたい遺跡のような気がしてくる。

一体どこなところなのだろうか、と心躍らせて、待ち合わせの駅まで7時間の旅路を行く。名古屋から飛驒に向かう特急は、岐阜県をひたすら北上する。次第に住宅が乏しくなり、列車は山深い場所をうねうねと縫うように走る。車窓に見える山との距離が近い。緑の重なり、えらい内陸部に来たなと実感する。

待ち合わせ場所であるJR高山本線の飛驒古川駅に到着した。駅前には、こじんまりとしているが古い町並みが残り、岐阜県を代表する観光地・高山とセットで訪れる人が多い場所だ。遺跡の最寄り駅は少し先になるが、飛驒市教育委員会の三好清超さんが飛驒古川駅まで

迎えにきてくれていた。

7時間の旅路で空腹は最高潮。駅前で腹ごしええをして、まずは塩屋金清神社遺跡から見つかった石棒が展示されている飛驒みやがわ考古民俗館で、実物を見てみることにした。

車中で三好さんから飛驒市に関していろんな話を聞いた。

飛驒市は、2021年現在人口が2・3万人。少子高齢化はほかの地域よりも30年先を行くスピードで、高齢化率は39%。人口減少先進地でもあるという。市全体の93%を森林が占め、そのうち7割が「広葉樹天然林」というあまり聞きなれない自然の山が覆っている。市域は豪雪地帯または特別豪雪地帯という環境。聞けば聞くほど飛驒市の環境は厳しい。

一方で、縄文時代はベッドタウンだった、という人がいるほど、多くの遺跡があり、多くの縄文人が暮らした。縄文人にとっては暮らしやすい場所であつたらしい。

宮川が流れるすぐ脇に飛驒みやがわ考古民俗館はあつた。

とても立派な施設で驚いたが、春と秋の年間30日しか開館していない。人口減少の影響によるのだそうだ。

考古資料は、旧石器時代から縄文時代までが展示されていた。もちろん目玉は石棒ではあるが、獣とおぼしきものが付いた土器や、土偶もある。土器は北陸の影響が見られるらしい。わたしが特に気に入った土偶は、長野県茅野市の国宝土偶「縄文のビーナス」にどこことなく似ている気がした。

なるほど、たしかにこの地域はベッドタウンになるかもしれない。

山のなかだが、富山方向へ抜ければ日本海へと出られる。日本海に出てしまえば、海路で東北地域にも行けるはずだ。一方、山の稜線や川を使えば長野方面への行き来もたやすいだろう。

実際に縄文人がつくったもののなかに交流の痕跡を見つけ、「飛驒は縄文時代のベッドタウンはさもありなん！」と気持ちがいよお持ちかねの石棒だ。

さあ、次はいよいよお待ちかねの石棒だ。

祈りの石棒づくり

塩屋金清神社遺跡は、館の脇を流れている宮川右岸の階段状に盛り上がった（河岸段丘^{かがんだんきゅう}）上にある。

明治の頃にはすでに石棒がたくさん見つかる場所として知られていたらしい。平成4年（1992）から5年（1993）にかけておこなわれた発掘調査では、縄文土器のほか、つくりかけを含む石棒、石棒を製作した際に出た石屑、石棒を製作する時の道具として使われたであろう石器などが見つかっている。

三好さんによると、遺跡に隣接して広がる山が石棒の石材の産地らしい。

なんだ、この距離感は。産地と加工場所がとなり合っていたのか。山に入り、石棒にする石を採取して皆で運び出し、川沿いで賑やかに作業していた縄文人たちの姿が見えるようだ。これは理にかなった場所だ。

塩屋金清神社遺跡で見つかった石棒は1074本にもなった。通常、一つの遺跡から石棒が見つかったとしても数本程度。それが1000本以上あるなんて破格としかいいようがない。なんでこんなに大量に。不思議だ。

しかも、石材の原産地がわかっている、つくりかけの石棒も見つかっている。つまり、石棒づくりに関わる一連の工程が解明できる非常に珍しい遺跡なのである。

展示室でも石棒を見ることはできるが、今回は特別に収蔵庫にある石棒を見せてもらえることになり、つくりかけの石棒も見せてもらった。コツコツと石の表面を叩きつづけたものの、途中でやめてしまっている。

なんで製作をやめたの？　ここまで叩いておいて。

「石棒づくりは、石で表面を何千回も叩くんです」

三好さんの言葉を聞いて、意識が遠のきそうになった。

まるで修行ではないか……。

あれ？もしかしてその修行のような行為に意味があったんじゃないか？
頭のなかぐるぐると動き出す。

大きな石棒をともにつくることで共同体の結束を強化した、ということ聞いたことがある。東日本でおもにつくられたストーンサークルも、同様の理由がいわれる。たしかに、それもあると思う。

でも、それならなぜ途中で製作をやめた石棒があるのだろうか。

もしかしたら、完成した石棒に意味があるのではなく、仏師が無心に鑿のみを入れるように、石棒をつくる行為そのものに意味があったのではないか。石棒づくりは祈りの行為のひとつであり、皆で「コツコツ」と叩くリズムとともにトランス状態に陥り、つくること自体が「まつり」になったんじゃないか？

コツコツコツコツ……。

コツコツコツコツ……。

コツコツコツコツ……。

コツコツコツコツ……。

妄想が広がっていく。

なかにはまったく手つかずの石の棒（「石棒」と呼んでいいものかどうか、憚られてこの言葉）もあった。これも未製品と片づけることもできるが、彼らにとってはそのままの姿で意味がある、ということもあるかもしれない。この遺跡の調査担当者の一人が、そのような話をしていたことが頭をよぎった。

彼らにとって、石棒とはなんだったのだろうか。そもそも、大量に石棒をつくる必要がどこにあったのだろうか。

石棒は大地のおすそ分け

暗くなってしまう前に急いで原産地の山に行くことにした。石を採取したり、持ち帰ることとはできないが、山道から石材の露出する山肌を見ることができるといいのだ。

前日に雨が降ったようで山道はぬかるんでいた。すべって転んではいけないと、屁っぴり腰で山道を登る。だんだんと外界の音が遮られ、静かな林のなかへと分け入っていく。

「山肌を見てもらえますか？」という三好さんの声に横を向くと……

山肌から棒状の石が突き出ているではないか。



なんて不思議な光景なんだ。

「この山は柱状節理でできていて、こうしてグラグラになったものをスポンと抜けば、石がとれるんです」とゴトゴトグラグラ揺れる石に軽きさりながら、三好さんが説明してくれた。

目が点になる。

思っていたのとまったく違った。

てっきり、石を切り出しているのかと思っていた。

「足元を見てください。ほら、原石が落ちてる」

湿った地面におとなの前腕ほどの太さと長さをもった石の棒が転がっていた。それも何本も。いずれも考古館で見た「手つかずの石の棒」とそっくりだった。わかっていたが、目の前にポ

ロンと落ちていると「本当にそのままなんだ」という衝撃があった。

「すでにこれ石棒ですよね」というと「そういうものを含めると、実際はかなりたくさん石棒が縄文時代にはあったんでしょうね」と、三好さんは笑う。

実はわたし、各地で石棒を見てきたものの、その原石がどういうものなのか、見たことがなかった。というか、関心がなかったというほうが正しい。ところが、ここの原石は角柱状で、原石のままで「石棒」なのである。

石棒は縄文人の手にかかる前からすでに石棒なんだ。

ふと、ある考えが頭に浮かぶ。

縄文人たちは、山肌からポコッポコッと落ちてくる石を見て、これは大地からの贈り物だ、と思ったんじゃないだろうか。

すべての命を育む大地が、剝がれるようにして落ちてくる。それは大地が新陳代謝しているようでもある。だから縄文人たちはそれを持ち帰り、そのまま大切にしたり、男性器を模した形に仕上げた。大地から贈られた「命のもと」で人間の命に欠かせない男性器をつくりながら、子孫繁栄を願う。

静かな山中で足元に転がる石の棒を見つめていると、そんなことが頭に広がっていく。



所在地

石棒とはなんて不思議でおもしろいだろう。今回の旅でわたしは確信した。
飛驒には石棒が欠かせない。

◆【塩屋金清神社遺跡（飛驒みやがわ考古民俗館）】

岐阜県飛驒市宮川町塩屋104

TEL0577-737496（飛驒市教育委員会文化振興課）

* 飛驒みやがわ考古民俗館は開館日が年間30日程度のため、訪れる際には事前に要確認。

* 塩屋石を産出する区域は山道に沿って見学のこと（山中への立入り不可）。石材の採取・持ち帰りは禁止。

この石は塩屋石^{しおやいし}という。この塩屋石でつくった石棒が北陸で見つかっているのだが、塩屋石はここでしか採れない。つまり、ここでつくられた石棒が北陸まで運ばれた、ということだ。北陸の人が来たのか、飛驒の人が持っていたのかはわからないが、この「大地から贈られた石」はきつと双方にとって重要な意味をもっていたのではないだろうか。

「塩屋金清神社遺跡は石棒の生産センターである」という研究者もいる。生産センターであるとともに、塩屋石というこの地にしかない財産が周囲の人びとを引き寄せ、人が行き来する場所になり、そしてベッドタウンになった。この場所には日本一多くの石棒が残され、きつともつと多くの石棒が周辺に渡ったんじゃないだろうか。

改めて山のなかを見渡し、なぜだか神妙な気持ちになった。

またしても尻つぶり腰で山道をくだり、無事に帰路に着いた。その電車のなかでわたしは考えていた。

現代の飛驒市が「関係人口」という「飛驒市に関わる人びと」を増やそうと石棒を活用したプロジェクトを展開している。それは市の存続を図る方策の一つだ。わたしが飛驒の山中で想像したように、飛驒の縄文人たちが集団を維持するために石棒を使って子孫繁栄を願ったのだとしたら、そして現代もまた生き残りをかけて石棒を使って周辺地域とネットワークをつくっていくのだとしたら、いつの時代もこの地では石棒が人をつなぐのかもしれない。